

Title	3) 「研究開発コロキウム」報告(グローバルCOE) : ナラティブデータに対する多角的検討
Author(s)	黒田, 真由美; 浦田, 悠; 莊島, 幸子; 竹家, 一美; 木戸, 彩恵; 岩井, 泰穂; 塚本, 朱里; 米田, 量; 西山, 直子
Citation	研究開発コロキウム : 平成19年度 成果報告書 (Colloquium for Educational Research and Development) (2008): 82-91
Issue Date	2008-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/143070
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

ナラティブデータに対する多角的検討

黒田真由美・浦田 悠・荘島幸子・竹家 一美・木戸 彩恵・
岩井 泰穂・塚本 朱里・米田 量・西山 直子

1. プロジェクトの目的と活動の概要（黒田真由美）

（1）目的

質的データの分析のプロセスにおいて、多様な解釈の可能性を自覚しながらも、自らの解釈の必然性を見出すということが必要となる。また研究プロセスだけではなく、研究法の学びとしても、多様な解釈の可能性を自覚的に検討することが求められる。そこで、本プロジェクトでは、質的研究を行っている学生のフィールドから持ち寄られた生のナラティブデータを共有し、お互いに検討しあうことによって、質的研究の分析のあり方と、その学びについて考えることを目指した。

本プロジェクトは大きく分けると、「データ検討会」と「共同研究会」によって組織されていた。「データ検討会」は、個々人が収集しているデータを示し、データの解釈の多様性や妥当性について検討した。「共同研究会」（通称、なずな研）は、指導教官も含めて実施され、そこで各メンバーの研究の方向性も踏まえながらデータに関する討論をおこなった。

（2）活動の概要

「データ検討会」においては、学生がそれぞれのフィールドで収集しているナラティブデータを用いて、データの収集プロセスから解釈の方法といった分析のプロセスや、研究倫理について幅広く議論がなされた。実際に、フィールドに関わり質的研究をおこなっているメンバーにとっては非常に刺激的な場となったと思われる。

次に、「共同研究会」では、特に修論構想を含め、個人が取り組んでいる研究をさらに展開することを目的とし、発表と議論を重ねてきた。

2. データ検討会についての報告

(1) 報告1. ナラティブ研究会の報告（浦田悠）

本コロキアムの主旨の一つに、「分析過程を共有し、それぞれの参加者が積極的にそのデータの解釈の多様性についての議論を行う」というものがあつた。筆者は、1月13日に実施したナラティブ研究会において、自身のナラティブデータを提示し、この主旨に基づいてインセンティブな議論を行った。

筆者が発表したのは、離島および老人保健施設の高齢者の語りのデータであつた。筆者は、以前、離島および老人保健施設でインタビュー調査を実施し、高齢者の自己物語の聴取をするとともに、回想の心理的健康へのポジティブな影響を検討した。

研究会においては、このうち人生の意味づけについて特徴的な語りを呈した3事例を取り上げ、それを元に発表・討論を行った。具体的な発表内容としては、70代の独居高齢者、80代と90代の特別養護老人ホームの高齢者の3人に、印象的なライフイベントについて想起してもらい、それにまつわるエピソードを語ってもらったデータを、KJ法を用いて帰納的に分析して作成された意味連関図と、特徴的な語りの具体例を用いた。セッションでは以下のようなプロセスをふんだ。すなわち、①それぞれの語りの概要を、具体例を示しつつ説明する、②KJ法で図解化した模造紙をメンバーに示し、筆者自身の分析プロセスを提示する、③メンバーが各自の解釈群を出しながら話し合う、という3段階である。

筆者の解釈としては、それぞれの高齢者の語りについて、①日常的な出来事から人生全体の意味づけをするパターンと、②人生全体の意味づけから日常的な出来事が意味づけられるパターン、および、③現在の喪失経験によって現在に中立的な意味づけがなされているパターンの3つを示した。筆者自身は、このようなパターンに分類することに、それなりの省察を経たつもりであつたが、このように特定の視点からパターン分けしたことに対して、それに当てはまらない部分が不可視になっている可能性があると感じていた。

今回の討論では、メンバーから活発に意見が示され、筆者の分析では見えてこなかつたさまざまな視点の可能性が提案された。たとえば、筆者の分析の観点は、上記のようなパターンの抽出によって語りの内容の意味連関を検討するというものであつたが、参加者からは、語りの形式についての視点や、それぞれの個別具体的な文脈に沿った分析の視点の提示があつた。たとえば、筆者は、分析に際し、面接協力者の語りの内容のみを分析の対象としていたが、メンバーからは、「孫のような年齢の大学院生と、後期高齢者である協力者」という、筆者と協力者との関係性の中で紡ぎだされる語りの意味についての考察の可能性や、家族の死や現在の生活環境などの具体的なライフイベントに密着した解釈の可能性などが示され、それぞれが筆者の分析にはない見えの気づきにつながつた。

(2) 報告2. “ナラティブの多角的検討” 研究会に関する報告書 (荘島幸子)

授業参加の目的：質的研究における重要な概念となっているナラティブ（語り、物語）について、各自の研究・調査から得られたローナラティブデータについての検討および質的研究を志す院生との学術交流を行うことが授業参加の主な目的であった。ナラティブと一口に言っても、個々の研究におけるその扱い方や認識は異なっている部分もあり、同じ質的研究を目指す仲間達がどのようにナラティブを扱い、捉えているのかという点についてうかがい知ることができるのも大きなメリットであった。

経過状況：研究会は、1回につき2コマという長い時間をかけて行われ、ナラティブ検討会としては非常に充実したものである。参加メンバーは、ナラティブに興味があり、実際に研究に用いている者であり、分野が異なる領域からの参加者もいた。とはいえ、ローデータを扱うという点から、研究会自体はクローズドに行われ、そこで得られた情報も外に漏らさないように設定された。ディスカッションでは、学年の違い、領域の違いに関わらず活発な意見交換がなされた。研究会後にも引き続き院生が指導することもあり、学生間の学術的な関係性も形成されていった。

得られた成果と今後の展望：これまで、学生生活を続ける中で、研究発表の場は幾度となく設けられてきたが、学生同士が横につながり、クローズドな場所で、長い時間をかけ、ローデータ（なかにはインタビューデータだけという場合もある）をさまざまな立場から検討できる機会はほとんどなく、外の他の研究会でめったに経験できることではない。また、ナラティブを扱い、研究を行っていても、いつも話している仲間同士では、どうも一歩先へ進めず、行き詰ることも多いが、別の領域からの参加者もいたため、その立場での観点から話されることは常に興味深く、学びを深められた。さらに、発表者のインタビューデータを共有し、ディスカッションできたのは非常に刺激的であり、研究会を通じて自分の視点の癖というものの方がより明白になったと思う。

また、自分の発表を他者が受け入れ、一緒に考えてくれるというのも研究者にとって貴重な場であろう。ある意味では、自分の在り様をさらけ出し、それを受け止めてもらい、次に進もうと背中を押してくれる仲間ともいえるような人たちとの出会いは、何よりも大きな収穫であった。質的研究は、短期間でなされるものではないため、自分の研究について他者に（研究の背景まで含めて）理解してもらうのには他者にとっても非常に骨の折れる仕事である。また、公には明かせない研究の困難な部分もある。しかし、そのような細かな部分について他者が熟知していてくれることは自分の研究の大きな助けとなり支えとなった。

今後は、本研究会がそうであったように、例え研究分野や志す目的に違いがあろうと、同じナラティブという括りで集まって議論できる場が必要だと思う。守秘義務の問題や立場の違いによる議論の難しさも生まれうるが、それについては皆で考えていきたい。

(3) 報告3. 事例検討セッションの意義 (竹家一美)

問題意識と目的：筆者は従来の量的研究によって実証されてきた数々の成果への違和感を払拭したいとの意識から、これまで「当事者の思いを掬いとりたい」という意図のもと、対象にアプローチしてきた。そして「生の声」を「語りデータ」として分析する際には、「当事者の視点に立って解釈し理解する」よう努めてきた。ところがデータの分析を終え記述してみると、せつかくの「生の声」が十分に活かしきれていないような気がする。当事者の視点に立った分析を心がけているとはいうものの、筆者自身の主観を解釈から排除することは不可能である。また、当該研究目的には、もっと相応しい分析手法があったのではないかと、という疑問も拭いきれない。

データ解釈は質的研究の中心となる作業である。それだけに、どのような理論的立場から解釈を行うのか、どのような手法を用いて分析を行うのかということは、質的研究を行う者にとっては極めて重要なことだと思われる。選択は自覚的になされるべきであり、自身の立ち位置を明確に開示することも求められよう。しかし、単独でデータと向き合い再帰的にテキストと対話するだけでは、自ずと限界が生じる。当該研究で見たかったものは見えたのか、当事者の声は「声」として伝わっているのか。そのような問い直しは、自己の解釈やテキストを開示しうる場における他者との対話の中でこそ、有効に働く。多様な解釈の可能性を知ることは、逆に、自身の立場の明確化や分析手法の精緻化につながるのではないだろうか。

そこで、筆者が求めていた自己の解釈やテキストを他者と共有する場になりうると思われ、また得難い機会でもあったので参加した。参加の目的は次の2つである。第1は、他者との対話を通して自身では認識できなかった視点や気づきを得ること、第2は、他者の具体的な解釈や分析の手法を理解することにより、ナラティブ研究の知見を深め、今後の研究に反映させることである。

経過状況：セッションは、比較的少人数で実施されたが、参加メンバーは多様な背景を有していた。ゆえに、「ナラティブへの関心」という共通項で結ばれた、分野を越えた協働の学びが実践された。具体的には、発達教育と臨床心理の院生が参加して、相互作用的に新たな学びが生成された。ナラティブという関心や手法は同じでも、目的や対象とする現象が異なるので、通常のゼミなどとは違う新鮮な議論が生まれた。お互いに刺激を受け視野を広めた結果は、それぞれが個々のフィールドに戻った後、何らかの形で研究に反映されるのではないだろうか。

得られた成果と今後の展望：筆者の事例検討セッションでは、筆者がインタビューを行った一女性のデータを呈示し、議論の土台とした。そのデータは、長い間、筆者の中で「ひっかかっていた」語りデータであり、再検討しなければならないと考えていたデータであった。

セッションを通じて、筆者の問題意識は参加者に共有され有用な助言が得られた。少人数でしかも院生同士という空間は、素朴な疑問も臆することなく発言することが

でき、即効的に利用できそうな知恵や技が伝授される場にもなりうる。「ああ、こんな見方もあったのか!」とか、「こんな切り口で分析することもできるんだ!」というような、目から鱗の驚きを伴った気づきが得られたことは、極めて大きな利点であり、学びへの興味・関心が促される場でもあった。

今回、筆者は、同じテーマについて得られた複数のデータ(対象)における、例外的なデータ(事例)の扱い方をどのようにすべきか、という問題を提起した。対象を1事例に限定しないかぎり、例外的な事例と向き合わねばならないのは必然である。そして、通常は、一つの人生の中にも、何パターンかのある種の共通性が見出される。ところが、なかには、どのパターンにも属さない、極めてユニークなパターンもある。データを分析した結果、そのような独自性が見出されたとして、それをどのように記述したらよいのか、というのが、筆者が抱えていた課題であった。

今回のセッションがより有益だったのは、臨床心理学領域では、そのような例外事例を扱うことが珍しくなく、むしろ通例でさえあるということであった。したがって、筆者に欠落していた視点の教示を幾つも受けることができ、記述以前の分析・解釈の時点でのデータとの向き合い方についても多様な示唆を得ることができた。異なる研究領域の人との議論によって、潜在化していた問題や無意識の思い込みが抽出され、既に問題視していた現象についても、新たなテーマや切り口が見出されたことは、筆者にとって思わぬ発見であり、幸運であった。さらに、他領域の人からの意見が刺激となって、普段からゼミなどで顔を合わせている同じ領域の諸氏からも、さまざまな意見が出され、筆者の呈示したデータについてはもちろん、ナラティブ・アプローチ全般における方法論を検討するような討議がなされたことは、大変に有意義なことであった。

今後の展望としては、さらに多様な領域間での院生主体の学びの場が展開されることが重要になってくると思われる。ナラティブ研究は、心理学、教育学、社会学、医学、看護学等々において幅広く行われている。その学問領域は、今後ますます拡がり、より学際的になっていくのではないだろうか。そのような状況を鑑みると、ナラティブの分析はよりいっそう多様性を帯び、解釈の可能性はいかようにも拡がるようにさえ思われる。ナラティブ研究そのものの可能性を狭めることなく、他領域におけるナラティブへの相互理解を深めるために、自己のテキストや解釈を開示し、幅広い他者との間で対話することが重要であると考えられる。そのような幅広い対話的往還を、早期から躊躇なく実行することこそ、数多ある分析手法や解釈の可能性の拡がりを認識したうえで、自らの解釈の必然性を見出す一助になると思われる。

(4) 報告4. 「コロキウムをとおして学んだこと」(木戸彩恵)

授業参加の目的: 質的研究において、語られたデータをいかに分析するかは、大変重要なテーマである。分析法の選択は、研究の質を左右するため、多様に存在する分析

法の性質を正しく認識し使い分けるための、知識とスキルが必須である。個人で研究を続けていると、無自覚のうちに、ある特定の方法論に縛られてしまうことや、研究分野でメインとなっている方法論を使用してしまうことがある。そのため、特に、事例検討セッション形式での授業をおこなうというこのコロキアム授業の性質から、専門外の分析データに触れること、その分析過程を具体的に知るができるだろうと考えた。さらに、院生同士が互いに切磋琢磨しながら繰り広げられるこの授業は、自分自身のディベート能力を身につけることにも、研究の省察にも大変有益であると思えたため、参加を決定した。

経過状況：半期のコロキアム授業を通して、参加メンバーの多様なデータと出会うことができた。とりわけ、本コロキアムの参加者には、同講座の院生のみではなく、他講座の院生も含まれていたため、通常のゼミでは出会わないような事例に遭遇することができた。

基本的に、コロキアム授業では、発表者となる参加メンバーによってすでに分析されたデータと生のデータの両方を見ることが可能であったため、特になぜその分析方法を用いたのか、他の分析法を用いることにより、どのような可能性を提示されているデータに対して見出すことが可能であるかについて思考を進めていくことは、共同的学びの中でも、最も楽しい作業であった。参加者は、自分の研究と向き合うときと同じように、真摯に検討をおこなっていたし、発表者は参加者からの意見を受け、研究に対する省察を深める。いったん分析が終わったデータに関しては、省察の機会を持つことが難しいこともあるが、本コロキアムでは、それがごく自然な形で実践されていた。

特に、研究倫理については、他講座の院生がより敏感な認識をもっていたため、ディベートの中での学びも大きかった。授業を受けて関心が高まったため、自ら研究倫理に関する文献を探し、学びを深めることができた。研究倫理をめぐる問題は、近年多くの研究分野において感心が高まっている問題である。そのため、特に今後、研究を続けていく上では必須の問題となってくるだろう。その問題について、少しでも学びを深めておくことは、私にとって必要不可欠であったと考えられる。

得られた成果と今後の展望：本コロキアムに参加して、論文執筆に有益な知見の交換をおこなうことや分析の観点を得ることができた。多角的な視点からのデータセッションは、大いに私自身の研究にフィードバックし、生かすことができた。また、発表した際には、分析に関しての指摘はもちろん、データ提示の方法や論文の構成の仕方についても、貴重なアドバイスや意見をいただくことができた。そのため、コロキアムの目的以上のものを、得ることができたと感じている。さらに、研究の方法論や倫理の問題に、これまで以上に自覚的になることができたことで、研究関心も広まった。本コロキアムにおいて得た新しい研究関心を今後の研究につなげていきたい。

本コロキアムのように異なるフィールドを持つ院生が一同に会してデータセッション

ンをおこなう機会は、非常に貴重である。特に、院生同士という水平的人間関係の中での徹底した討論をすることは、研究関心を広めることや知識の共有にもつながり、今後の研究の糧にもなると考えられる。そのため、来年度以降も、ぜひこのようなデータセッションの授業が開かれることを望んでいる。さらには、このような形式でのデータ検討をおこなう研究会やワークショップなどを自ら積極的に提案していきたい。

(5) 報告5. コロキアム授業参加と修士論文(塚本朱里)

目的：筆者は修士論文において方法にインタビューを用い、そのデータの分析・考察を行っていた。このコロキアムでナラティブデータの分析方法を検討する中で、自らの研究への示唆を得、論文に生かすことを目的として授業に参加した。

修士論文では、歌手の「松田聖子」を同時代の女性たちにとってのモデル物語としてとらえ、そこに語り手の女性たちが自らのライフストーリーをいかに重ね合わせるかについての分析を行っていた。そして、コロキアムで自らの研究を整理し、口頭試問をはじめ今後の活動に繋げることを目指して発表を行った。

経過状況：修士論文「モデル物語『松田聖子』と同時代を生きる女性のライフストーリー」の提出後、内容の要約からレジュメを作成して発表した。参加者から、考察の部分や、「松田聖子」を題材として取り上げた意味、研究の独自性についてなどの質問を受け、それに答えることで論文の再検討を行った。

得られた成果と今後の課題：既に修士論文を経験している先輩からの助言を得られたことで、独りで論文と格闘する中では見落としていた点から論文を見つめなおすことができた。また、他の参加者の発表を聞くことで、自分の発表に欠けていた部分や、口頭試問に向けて発表を組み立てなおすために必要なことを知ることができた。同じ修士論文執筆者の発表からは明確に論点を整理するための示唆を得、卒業論文の執筆を控えた学部生の発表からは、論文執筆前に持っていた当初の問題意識を思い起こすことができた。特に今回は、普段なかなか聞く機会のなかった臨床の方たちの発表を聞き、また質問を受けることで、新たな視点が加わり、より多角的な検討を行っていただけだと考える。

一方で、発表を行ったことで自らの課題も浮き彫りになった。修士論文では、モデルの物語と語り手のライフストーリーを、語り口を中心に分析することで、20年以上のスパンに渡って2つの物語がいかに関わりまた変化してきたかを見てきた。そこでは、長い時間を共に生きる中でモデルの物語が「自分たちの時代の物語」であるとしてとらえられるようになった様子や、モデル物語に共感することで語り手自身のライフストーリーが変化を見せる様子を見ることができたが、「松田聖子」物語が女性のライフストーリーのモデルとしていかに働いているかの位置づけ等、結論の部分に不十分さや記述の甘さが指摘された。題材である「松田聖子」に研究自体が引きずられた形になり、女性の生き方が変化してきた中で女性の物語がどのような形をとるのかという

当初の目的意識の部分が希薄になってしまったと言える。

今回、院生を主体とするゼミで検討していただいたことで、より忌憚無いコメントをいただき、新たな一歩への力を与えていただいたと考えている。筆者は論文提出後のみの発表となってしまったが、このような場で検討されることで、課題が共有され明確になり、より深い観点から研究を進めることが可能になると考える。

(6) 報告6. 本コロキウムで生まれた絆を未来につなぐ (西山直子)

授業参加の目的：本コロキウムでは、すでに完成済みの研究を議論するのではなく、分析過程そのものを仲間で共有し調査者とともに考えることが目指された。昨年度提出した卒業論文においてよくわからないままに質的研究を試み、分析に苦勞した私は、この分野で研究を重ねている先輩方がどのようにナラティブデータを扱い、解釈し、まとめているのか、是非とも知りたいと思っていた。また、自分の研究を発表する機会もあり、ともすれば独りよがりになりがちな分析過程を他者の目にさらし、批判や意見を聞くことで、自分とは異なる観点が取り入れられ、解釈の幅が広がるように思われたことも参加を決めた理由である。さらに、心理臨床系の方々も同席し、研究室や学問領域の垣根を越えて、今後のコラボレーションの可能性を探ることも目的の一つであった。

経過状況：私は、本格的に活動が開始して初めての回で発表を担当した。昨年度採集したインタビューデータをほぼ生に近い形で提示し、自分なりの解釈を述べると同時に疑問点を挙げ、先輩方からの助言やご指導を求めた。討論では様々な角度からの質問や率直な意見が出され、改めて自分の研究を振り返り見つめ直す契機となった。また、温かい励ましの言葉もいただき、これから研究を進めていくうえでの勇気を得た。

その後、博士課程の先輩方や心理臨床系の方々の発表が行われ、研究の進め方や分析の仕方、論文のまとめ方など、勉強になった。2008年1月に入って行われた最終回では、今年度修士論文を提出したばかりの修士2回生の方々ができたてほやほやの新鮮な研究成果を発表された。先輩方の発表を聞いていると、真摯に研究に取り組む姿勢や内に秘めた熱い思いが伝わってきて、大いに刺激を受けた次第である。

全般を通して、自由闊達な雰囲気の中で盛んな議論が繰り広げられたように思う。おかげで私も、気兼ねなく素朴な疑問や意見をぶつけることができた。発表のやり方のみならず、このような場における質問の仕方や討論の進め方など学ぶべきところが多く、非常に参考になった。

得られた成果と今後の展望：研究の核となる分析過程をさらすことは、研究者の奥深い内面をさらすことでもある。それゆえに、発表者にも参加者にも相応の覚悟が求められた。強い信頼関係なくしては、このようなデータ分析セッションは成し得なかったであろう。回を重ねるごとに互いの研究内容に対する理解が深まり、親身になったアドバイスや有益な情報交換が行われるようになった。このコロキウムを通して研究

室内の絆がより一層強まり、さらに、外部との交流が生まれたことが、一番の成果であったと思う。

これから修士論文に向けて準備を進めていかねばならない私にとって、経験豊かな先輩の温かい眼差しのなかで、研究室全体で共に考え歩んでゆく土壌ができているのは大変心強くありがたいことと思う。今回の発表で得られた重要な示唆を踏まえ、自分の関心をとことん突き詰めて考えてゆきたい。

3. 共同研究会についての報告

共同研究会では、個々人の研究に関する議論がなされ、その成果の一端として、修士論文が提出された。その成果を以下に示す。

(1) 修論要旨 (米田 量)

問題と目的：現代日本において、戦後の経済の高度成長期を終え、物質的豊かさが享受された一方で、経済効率重視の体制から生まれた人々におけるつながりの希薄化が様々な場面で顕在化している。つながりを回復する運動として、構成員の関係が水平であり、個々の主体的意思が尊重されるネットワーキングとよばれる組織形態が注目されている。鶴飼 (1994) は、ネットワーキングは、コード化を参加の契機としながらも、異質なものとの出会いによって一義的な情報を新たな了解へと転換する「コンテキスト」創造の運動であるとし、ネットワーキングの意義は、そこにおいていかに豊かな意味世界を提供するか、出会いの場をつくり、意味創造のコンテキストをどこまで構築できるかにかかっていると述べている。

本論は京都府宇治市において、田植えから収穫までの無農薬米づくりの実体験を市民に提供する活動「結いの田うじ」を行うグループを対象とし、そこがいかなるコンテキスト創造の場であったのかを、活動実態とともに明らかにすることを目的とした。調査方法：活動における参加者のやりとりや関係性および、結いの田活動の実態を把握するために、活動日全8回をカメラおよびビデオカメラで記録し、分析した。また個々の参加者がこの活動における経験の意味づけをインタビューから明らかにした。結果と考察：結いの田うじ活動は、活動終期に参加者同士の交流ややりとりが僅かに生まれたものの、総じて成員間の結びつきが起こる場としては、あまり十分に機能しなかったといえる。作業に対する参加人数および参加回数の少なさ、交流する時間の少なさが、この結果の要因であると考えられる。また元々のスタッフと参加者の役割が固定化したことや、スタッフ側の時間や催しの管理などにより、参加者が主体的に場を創造していく余地があまり存在せず、ネットワーキング的な性質はあまり持ち得なかったと考えられる。参加者のその場の経験の意味づけに関しては、2名の事例において、農や自然と自分自身との関わりに問題意識や関心をもっていた参加者が、こ

の場での経験を媒介させ、自身の問題意識や信条、またそれに対する現在の自分の位置づけを調整していることが語りからうかがわれた。以上により、農や自然が関わることにに関して、成員が自身の問題意識を確認し、それに対する自身のあり方や認識を再調整し、意味創造する機能をもつことがうかがわれたが、成員間の結びつきがおこり、その関係性の豊かさがもたらされるネットワーク的な性質をもつためには、グループの構造や管理体制の変化が必要であると考えられた。

(2) 修論要旨 (岩井泰穂)

目的：稲荷信仰は、日本の民間信仰というものの中にあつて、最も日本人に浸透している信仰である。日本人の信仰を代表するものとして「稲荷信仰」を取り上げ、調査した結果、信者が信仰生活の中で最も大切にしているものは「感謝の気持ち」であることが明らかになった。では、稲荷信仰の信者の語る「感謝」とは、生活の中でどのような意味づけをもって捉えられているのだろうか。そして、何を中心とした「感謝」なのだろうか。本研究では、「日本人の信仰」の典型事例として稲荷信仰を取り上げ、信者さんをはじめとする「信仰に関わる人々」の語りを聞くことによって、稲荷信仰における「感謝」の構造・意味づけを探ることを目的とする。

方法：稲荷信仰に関わる人々に、5件7人のインタビュー調査を行った。ICレコーダーを使用し、逐語起こしをして分析した。

結果と考察：「感謝」は何よりも重要なものである反面、決して特別なものではなく、生活の中に溶け込んでいるということが言える。彼らは具体的な結果を求めて感謝するのではなく、日々の営みを無事に過ごせることに対して感謝を捧げており、日々、神様に手を合わせることに、そしてそれを続けていくことが重要なのである。また、最初は具体的で身近な部分から始まった感謝が、次第にごく日常的な部分にまで拡大されていくということも、信仰への傾倒と共に起こる現象ではないかと考えられる。

信者とそうでない人を比較するという意味でも非常に興味深い。信者が語る「出会い」と共通するものがあり、身近なところから感謝の心、そして信仰心が芽生えていくのではないかと考えられる。信仰、そして感謝をすることによる変化としては、ほとんどの人が、「安心感」を挙げた。心の中で無意識に支えとしていることが窺える。また逆に、神様に見られていることによって「悪いことはできない」「人に迷惑をかけられない」などという、道徳的な面での意識を語る人も多かった。

今回の研究から、予測していた以上に「感謝」が重要なものとして生活の中に溶け込んでいることが明らかになった。信仰をもつ人々の感謝、そして信仰を持たない人間の感謝は、一体どのような違いがあるのか。今回の研究を通して、それは「意識するかしないか」という部分の違いではないかという結論に達した。感謝が、何かをしてもらった時など目に見えるものに対してだけでなく、そして「今ここに在ること」にまで広がっていくのが「信仰における感謝」なのである。